
エンダ

日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンダ

【Nコード】

N8274X

【作者名】

日葵

【あらすじ】

繰り返される毎日に、気持ちがすり減る日々。何の為に、誰の為に生きているのかすら、分からなくなっていた。でも、だからと言って……ここから逃げ出して、この扉を開けるなんて、私には出来ない。

（注）残酷な描写は無い予定ですが、一応設定しました。

別サイトで同作品を掲載しております。現在8章まで掲載中です。

第1章 Usual spot - 1

二年程前から、自分の存在価値について考え込むようになった。もっと言えば、全てが虚しい。生きる価値を見出せない自分に気づく。

一番の原因・・・それは分かっている。三年前、突然襲った母の死。それからだ、全てが虚しくなってしまったのは。

亡き愛する人を思い出すのは辛い。辛いのに、毎日思い出さずにられない。

私の母は本当に苦労人だった。働かない父親のせいで、幼い記憶の中の母は、一日中働いていたように思う。

母の記憶は、私の胸をこんなにも苦しくする。飲んでは暴力を振るう父親から、いつも守ってくれた母。無償の愛・・・母から受けたこの愛で、私はこの世界で生きる事が出来た。父親が亡くなって、ようやくと親子二人で心穏やかに暮らせるようになって、いつも私が、

「いよいよこれからお母さんの人生だよ。」
なんて言っていると、

「今までも自分の為に生きてきたわよ。」
そう、そつと笑う人だった。そんな母が大切に、大好きで、愛している、ありがとうともつと伝えれば良かった。もつと伝えたい事は沢山あったのに・・・。
その都度、別の私が叫ぶ。

『こんなに関われる事を、母は望んでいない。』

はぁ・・・もう三年も経つのに、一体いつになったら、母の事を暖かい気持ちで思い出せるのだろうか。昨日まで話していた声が聞

けなくなつて、大切な人が突然いなくなつて……。寂しい。虚しくて堪らないのだ。私はこれから、寂しく長い人生を送しかない、そう思わずにはいられない。

今までは、どんなに居た堪れない気持ちに陥つても、帰れば母がいた。そこには、私が帰る場所が確かにあつた。それが当たり前だつたあの頃。一人じゃなかつた、あの頃。母の死後、私はこの都会でたった一人だ。生きて行くだけの人生を送っている。大げさと思われるかもしれないが、心の虚無感が私を負の感情へ押し流す。それからの私は、

「孤独」

この言葉に、都度苛まれるようになった。

勿論今の状況は、母の事だけが原因ではない。仕事、友人、恋愛、結婚の事、全てにおいた将来の自分。女三十代。結婚の予定も無い。あるとすれば、社歴だけが長くなる仕事だけだ。

生きていく以上は、どのような立場であろうと働かなければならない。それが社会だ、という現実だ。

実際、私の仕事は忙しいほうだと思う。毎日、毎年同じだ。数字の積み上げを行い、期限通りに仕事を上げなければならない。経理事務員として毎日二十一時位の帰宅時間となる。遅くも無いが早くも無く、そこから自分の為に何が出来るのだろうか？そんな余力があるのなら、明日の仕事の為に取っておきたい位だ。

一体誰の為に、何のために走り続けているのか？誰かに教えてほしい。私がどこに向かっているのか。・・・馬鹿な自分。全ては自分が選択してきたことなのに。

そして私は、何だ、何なんだ。そう自問しながら、今日も眠るのだ。

第1章 Usual spot - 1 (後書き)

第1章 Usual spotは主に主人公の女性の心の葛藤を書かせて頂きました。

少し重たい章になっておりますが、ここからストーリーが繋がっていくのかと思うと、今からドキドキしています。 それでは、楽しんで頂けるように日々精進致します。 宜しくお願い致します。

第1章 Usual spot - 2

「今でなくてはいいませんか？」

声のトーンを落とし、眼前の上司を挑発しないように、私は静かに問うた。しかしそんな気遣いは全て無駄に終わり、耳障りな声が響く。

「当然だろう！！人を育てるのに、時期なんて関係ないと思うが？　優秀な！優秀な人材にチャンスを与えるのは、会社の義務だ！！」

入社して数カ月ばかりの新人に、大きなプロジェクトを任せようという話だ。必要以上の怒涛に、思わず皆が振り返る。その視線を背中に感じながら、更に声のトーンを落としながら、

「でも、まだ日常の仕事も覚えていませんし。出来れば後数カ月、お待ち頂いても宜しいでしょうか？」

そこまで広くないフロアの中で、眼前の上司はテンションを上げるかの様に更に声を張り上げた。

「はあゝ？君に聞いているのは、ただの確認なんだが。彼が持っている仕事を君が出来るかどうかをだ。」

興奮している上司の声は、フロア全体に響き渡り、背中に感じる周囲の雰囲気は最悪だった。誰もが息を殺し、事の成り行きを見守っている。そんな皆の息遣いが聞こえてきそうで、嫌気がさす。会社がどう私を判断しているのか？そんな事を、こんな場面で何故曝け出されなければならないのか。

「私に、彼らの仕事を担当しろと・・・いうお話でしょうか？」

慣れている。こんなことは。今まで何度繰り返されてきたのだから。部内で新人の仕事だと認識されている仕事であっても・・・だ。本来ならば黙って受けるべきだろう。

『でも、一体いつまで??』

そんな心の葛藤を、見透かしたように口元を緩めながら、上司は言葉が続けた。

「そうだ。この部署に暇なのは君だけだろう?」

何がそんなに嬉しいのだろう・・・緩む口元を手で隠しながら、舐めるような眼で見上げてくる。

もつと業務的に伝えてくれたら、こんなに心が揺らされる事もないのに。上司はおもむろにデスクから、耳かきを取り出し、耳の穴を掃除し始めた。もうこれ以上話す気も無いのだろう。更に左手でパソコンのキーボード打ち付ける。

「・・・そうですか。・・・今担当している業務の事もありますし。少しお時間を頂いても宜しいでしょうか?」

そう、伝えるだけで精いっぱいだった。

(続く)

第1章 Usual spot - 3

「はぁ・・・。」

その日の夜、行きつけのBARで、止まらない溜息に友人を付き合わせていた。同じ会社で働く女性、沙織だ。営業の前線で戦っている沙織は強くて明るく、会社で一目置かれていた存在だった。部署が違う彼女と、ずっと接点が無かったのだが、経費の精算の件で話した時、

「ねえ、一度飲みに行かない？」

そう声を掛けられた。うちの会社の女性は、プライベートを重視する傾向がある。そんな中での誘いは正直驚いた。しかし見ため通りの性格に、いつの日か心を許せる唯一の友人になっていった。フロアも違うのに、こんな日には

「飲もうよ」と誘ってくれる。それが単純に嬉しい。

「本当にどうしたいのかしらね、女を。」

彼女のセリフは、何も私だけへの励ましではない。二年前に結婚した彼女は、大きなプロジェクトをあつさりと外された経験を持つ。営業でトップ三の結果を出し続ける、彼女に対する会社の期待は大きかった。女子社員の間では、結婚が過小評価の対象にならないのではないか？女性蔑視の傾向が強い、会社の転換材料になるのではと、ひそかに期待されていた。

しかし会社は、沙織をマネージャーから一般社員に降格させた。会社の言い分はこうだ。

「結婚をした以上、会社が君に対するリスクを負う事を認識してほしい。」

沙織は、ロックグラスをカタリと傾け、

「大体、あの人にそんな権限あるの？部長に相談しなよ。絶対私

的な意見だつて。毎日仕事もせずにインターネットをしているような奴よ。真に受けない方が良いつて！」

人の陰口を言わない彼女にしては、珍しい発言をする。勿論、私を氣遣う優しさだった。今は沙織の優しさにどっぷりと甘えてしまう。

「会社は私をどうしたいのかな？ 勿論仕事は一生懸命やるよ。お金貰っているし。でもあんな言われ方をしなければいけない程、駄目なの？ 私。」

もうどうやっても駄目の様な気がする。・・・もう・・・ごめん、愚痴だね、これじゃ。せつかく誘ってくれたのに・・・申し訳ない。

「
そう頭を下げる私に、

「全然！！聞くつもりで誘ったんだもん。いっぱい話しなよ。」
聞きながら、でも彼女はゆっくりと言葉を繋いだ。

「でも、ね。多分私、敢えて今のポジションを選択したの。会社の歯車として、頑張る事に限界を感じていたし・・・ね。」

そんな選択もあるよと、ヤンワリと言ってくれている。

「そうだね・・・。」

自分に聞きたい・・・私は、どうしたいの？ 一生働くことに不安がないと言えば嘘になるだろう。でも結婚の予定はないし、繰り返される生活に、劇的な転換期なんて訪れる筈もない。

「だから働いているの？ ううん、そうじゃない。生活の他に大事なものが仕事にはある。」

・・・私の存在価値というのだろうか。しかし、今ではその価値ですら見失いそうになる。昔は母がそんな存在だった。それが幸せだったのに。一体どうしてこんな事になってしまったのだろうか。こんな出口のない、問答を一体いつまで繰り返すのだろうか？

「昔はもつと飲めたのに・・・ごめん。」

「何言ってるの！ 今日付き合ってくれただけで、助かったよ。本当に楽しかった。スッキリしたしね！！旦那さんに宜しく伝えてね。」

」

「ううん、私も一緒に飲みたかったし。また行こうね。」

そう言って彼女は、彼女を待つ家族の元へ帰って行く。

帰宅時の電車の中は、平日の遅い時間だというのに結構混んでいた。ふと窓に映った自分の顔を見ながら思う。

『歳・・・取ったな（疲れ皺が醜く感じて、思わず目を背けた）。
・・・最近、愚痴っぽくて嫌になる。』

この電車みたいに、私の人生の行き着く先が分かっている、こんなに不安に成る事もないのに・・・そんな下らない事を考える自分に嫌悪する。考えてどうするのだ。良い事なんて起こる筈もないのに。

（続く）

第1章 Usual spot - 4

一人の部屋に帰った私はベッドに横たわり、何をするでもなく闇に身を委ねていた。いつもは気にならないふりが出来るのに、今日の出来事は無性に私の心に引つかかる。そう・・・こんな夜は困る。この虚無感に結論が出ない、この抜け出せないループが辛い。

・・・寝よう。いつか変わる。変わらなくても、私の考えがいつか変わるだろう。私の世の中に対する矛盾が矛盾でなくなる日が来るから。そう、思いながら目を閉じた。

「やだあ。ホントに無理。くらーい！」

クスクスと笑う声が、すぐ耳元で聞こえたような気がして、背中がゾクリと冷えた。

『今、何か聞こえなかった？まさか・・・』

私は一人暮らした。しかもここは、マンションの一室・・・現実的にこの声はあり得ない。思わず息が止まる。

・・・気のせい？ 動けない。少しでも動いてしまったら、何かが終わってしまいそうな気がした。横を向いたまま自分の心臓の高鳴りに、体が動かない。一瞬、静寂が広がり、暗闇だけが周辺に広がる。

・・・何も聞こえてこない、あるのは暗闇が故の静寂だけ。最近ネガティブな発想に陥りやすいせい、幻聴まで聞こえる様になっってしまったのだろうか。

「はあ！」

息を止めていた事すら忘れていた。

「大丈夫？私。」

そんな自分に、思わず一人言を呟いた。やっと、呪縛から解き放たれたように、体を捻り天井を見上げた瞬間・・・淡く光る何かが目

の前にいた。いや、浮いていたのだ。

「あ……。」

淡く光っているのに、闇に対して照らす影響力は無いかのように、その場所だけが淡い光で包まれている。こんな時に何だが、幻想的で美しかった。

どれ位の時間が過ぎただろう。

『……もしかしたら、光の屈折？』

そう思える程の長い時間が過ぎ、この奇妙な現象に、恐怖が遠のく様な錯覚に陥り始めていた。

思わず、思わず手を伸ばしてしまった。 あともう少しで、その淡い光に触れようとした瞬間、

「馬鹿なの？」

何の高揚もない、台詞のような言葉が、耳に届いた。

「ねえ……危機感ないの？」

相変わらず、球体は淡い光のままだったが、言葉を発する物体に言葉無くす。この光の存在自体はあり得ない。……とうとう、私おかしくなってしまったのだろうか？会社はどうしよう。友人は悲しむだろうか？生活出来なくなっちゃうな。あーきっと誰かに迷惑をかけてしまう。こんな状況下で、漠然と考えながらその光を見つめていた。

「危機感があつたら、不用意に触ろうなんてするの？今自分の気持ちの衝動だけで、動いているみたいだけど、全てにおいてそうなの？」

……私の中の声なのだろうか。だとすると、随分と容赦がない。

「そう……かもね。」

その光は明らかに失望しているかのような声を上げた。あまりに流暢に会話が続くものだから、会話をする事に違和感が無くなっていた。

「貴方に言いたいのは、自分のルールが世界の常識って思っていないかって事よ。私のルールから言えば、未知数の物体に自ら触れ

る行為は自殺行為だと思っし、貴方を支配している絶望も、貴方だけのルールにがんじがらめに縛られているように感じるけど？

そもそも、未知数の物体に安易に触れる行為が、この世の中の常識だというのなら、私のルールがおかしい事になるけどね。」

この物体の言葉は、至極当然だった。お酒のせいかもしれない。

恐怖よりもこの物体の発する言葉に、気持ちが悪く反応してしまう。

「私を支配している絶望？」

「状況はどうにでもなるのに、周りが変わる事に期待するが故に生まれてくる、絶・望。」

グツと手に力がこもり、体全体にじんわり嫌な汗を掻く。こんなお決まりのセリフに、いちいち熱くなってどうするのだ。そう思いながらも、感情が先に立つ。

「っ・・・！ 私は、私のルールでこんな状態になっているわけじゃ、ない！確かに全て私が選んできたわけだけど、世の中には不可抗力で、どうにもならない事があるの！嫌なら辞めることも選択肢の一つだなんて、他人だから言える言葉よ！生きていかなきゃいけないのに・・・。私は、私の限られた資源の中で出来ることをやっているだけよ！」

激しく高鳴る心臓が、今にも爆発しそうだ。

（続く）

第1章 Usual spot - 5

光は、くつくつと笑いながら、上下に震え、そして・・・

「ぷっ！ あーははは。それって自分の中で使いならされた言葉？ そうやって自分に言い訳しながら生きてきたの？ もう！ ヤダ。」

「・・・は？」

この夢か妄想から、正直早く覚めたかった。何故、どうにもならない現状を、こんな状況で否定されなければならないのか。この声が自分自身としても、息をするのも苦しくなる程悔しくて仕方がない。可笑しくて仕方がないと言わんばかりに、光の玉は未だに上下に震えている様子を見て、屈辱から布団を頭から被った。

・・・寝よう。病気のことは、明日考えよう。明日の朝、このままだったら病院に行こう。これからの事も、明日ちゃんと考えよう。全ては明日だ。

「・・・。」

部屋に静寂が訪れ、自分の息遣いしか聞こえてこない。布団の中で少し息苦しさを感じながら、どうかこのまま寝てしまいたい。このまま光が消え失せて、私をかき乱す余計な事を言わないように、ただただ祈っていた。

しかし、そんな私の願いも虚しく、

「ねえ・・・。」

自分の心の声なのか、光は執拗に話し掛けてくる。

「この状態を無視して、寝てリセット出来るなんて思っている時点でおかしいでしょ？」

『違う！！これは夢だから！！！』

微動だにしない私に向かって、淡々と言葉を繋ぐ光に、ジワリと嫌な汗をかく。こんな非現実をどう受け入れればいいのだろう。

先程の怒りの感情は通り過ぎ、今は明日から直面するであろう現実
に、言葉が見つからずにいる。

「・・・ふう。幻像でも、夢でもないわよ。私は。」

布団をはぐ事も出来ず、それでも光の発する一言一句を逃さぬよう
に、全神経が言葉を追うのだ。一体、何がどうしてしまったのだろ
う。

「大体、皆自分がおかしくなったか、夢かっと思うのよねえ。確
かにこの世界では現実的ではないかもしれないけど、全く他の発想
は出来ないものかしら？ 自分達の世界が全てだと思っている、人
間らしいと言えば人間らしいのかしらね！。」
布団を上げる事も出来ずに、布団の中の暗闇を凝視し続ける。

「・・・やばい・・・。本気でやばい。現実逃避もここまで来る
と、救い様が無いんじゃない？

これって日常生活が出来るレベルなのかな。どっちにしても、人に
迷惑は掛けない様に・・・しなきゃね。」

頼れる親戚なんて、知り合いなんていない。明日までこの状態が続
くようであれば、正気の内に対策を取らなければ、真剣にそんな事
を考えていた。

布団に包まっただまま、反応しない私にお構いなく光は語り続ける。
私に言い聞かせる訳ではないのかもしれない。まるで独り言のよう
に、ブツブツと呟いているのだ。

「そもそも、この生きにくい世界に固執して生き続ける理由は
なに？ 生きとし生ける者が、純粹に生きている事が、自然の摂理
ではないの？ 何故どう生きているのか？が、重要になるのか理解
出来ない。

考える事を与えられた人間の悲しいサガ？生きている事が一番重要
ではないの？ その理由すら追及せずに・・・一生自分は幸せで
はないと考え続けるの？」

光の問いかけに、自然に体が動いた。私は光と対面し、私は無意

識に大きな息を吐いた。

「私に、何が言いたいのか？」

（続く）

第1章 Usual spot - 6

光は相変わらず、鈍く光り続けている。

「提案があるの。貴方にとっては現実的ではない話をするけど。」
語られた内容は、光の玉が言う様に夢の様な話だった。あまりにも非現実すぎて、やはり夢なのか・・・そう感じざる得なかった。今この空間には、光と私だけが存在して居るかの様だ。

いやにゆっくりと誘うその声は、底に沈んで行くようだった。地の底から響く様な、優しい母の声のような、逆らえない父の怒鳴り声のような、何とも表現する事が難しい。今まで聞いた事がない、音に堕ちて行く様で、足元が覚束ないような錯覚を覚える。

「短的に言うけど、この世界を捨てて、貴方の経験を活かせる世界に行ってみない？」

「・・・転職のお誘いな訳？」

敢えて言ってみたが、言葉にした事を後悔する程の冷やかさに、グツと言葉に詰まる。

「・・・生きていく場所を、ちよつとそこまで変えてなんて話ではないわね。」

この世界、貴方が生きているという現実を捨てて・・・そうね、この世界で一度死んで、私が生きている世界に来てほしいって言ったら、分かる？」

光が発した「死ぬ」という言葉だけが、やけに現実的に感じて背中がゾクリと冷えた。

『え？え？え？死ぬ？えっ？何故？？もしかして、やっぱりやばい状態？何なの？いきなり死ぬなんて。』

緊張と恐怖のあまり、少し声が上ずっているかもしれない。

「・・・死ぬのは困るよ。」

「何故？」

何故困るのか、本当に理解出来ないと言わんばかりだった。私の言葉など何の障害にもならないと言わんばかりに、変わらない声は淡々と話す。

「死ぬといつても、別の場所で生きていくの。」

そもそも、今でも何故生きているのか分からないのでしょうか？ 貴方はこんなに頑張っているのに。誰も貴方の価値に気付いていないということは、ここに貴方の場所は、ここではないのではないかしら。恐らく、どれだけ時間を経過したとしても、貴方が置かれた状況は変わらない。いいえ？ 年を重ねていく分、もっと生きていくことが辛くなるわね。だって、周りが貴方の価値を分かっているんだもの？

辛いわよ。年を取った後に、後悔しても遅いのよ。断言出来るわ、貴方は、常に、絶望を、繰り返す。」

思わず、ごくりと息を飲んだ。今の状態よりも悪くなっている・・・将来の私。

「・・・そんなこと、分からないでしょ・・・。」
・・・ふふふ。

まだ分からないの？ そう言わんばかりに、光は侮蔑した失笑を発する。

「分かるわ。 貴方は、五年前も同じ悩みを重ねていたでしょう？ ただ今と違うのは、まだ将来に対して希望を持っていた事。多少若かったから。何事も経験だと思っていたのではなかったかしら。ま、仕事だけではなく全てに、おいてね。」

ほら、現に現状は悪くなっているでしょう？」
一時の静寂が訪れた。私の思考は、今や目まぐるしく動きまわる。今や私の心臓は、激しく高鳴り、息をするのも苦しい。断る言葉が即答出来ないのは、光が発した先ほどの言葉によって、押さえつけられているからだ。

『・・・そうだったな。』

少し状況は変わっているが、今と差ほど変化なく同じような悩みを

抱えていた事を思い出したのだ。変わりたくても、変わらない自分。
自分の現状は・・・悪くなる一方だということに。

（続く）

第1章 Usual spot - 7

「変わりたくないの??」

そんな言葉に、グツと体に力がこもる。この光は、私の思考が読めるのでないか? 冷静になろうとする私の心を、ピンポイントで掻き乱す。

「・・・変わる?」

思わず光が発する言葉を、復唱してしまう自分が悲しい。何故、聞いてしまうのか? この異様さは明らかなのに。私の反応に感触を得たのか、高揚したような口調に変化しつつある。

「ええ。それは勿論保障するわ。私の世界は、一〇〇%実力世界だもの。この矛盾した世の中よりも、随分シンプルよ。

貴方達は、私の世界でいう英雄なの。世界の民は、貴方達をエンダと慕い、尊敬し、崇めている。こんなちっぽけな世界での貴方の絶望なんて、取るに足らないものよ。」

「具体的に何を?」

光が強い感触を得ている・・・そう感じる私の心が警鐘を鳴らした。「危険だ」と。この状況下で興奮している自分がいる事是否定出来ない、と同時に冷静に分析をしようと躍起になっている事も事実だった。

「・・・私の世界の民を救ってほしいの。」

その光は、つい前までの饒舌が嘘かのように、随分と言葉を選択しながら話を進めているように感じる。

「今、私の世界は、今にも滅んでしまいそうな程、危機に瀕しているわ。罪もない、弱者が苦しんでいる。この状況を打破する事ができる救世主を、世界の民は探している。

・・・貴方だったら出来ると思ったの。だから、タブーを犯してこの世界にやって来た。」

光の言葉は、正直に言えば胸が熱くなる。しかし、その症状を恥

じながら、私は冷静になる事に努め、そして伝えた。

「あのね・・・。私に何が出来るの？私には特別な力も、人並み以上の腕力も、知性もないわよ。もっと言えば、もう四〇歳も近いおばさんなの。この世の中には、もっと貴方が望む能力を持った相応しい人がいると思うけど？」

・・・そう、私に何が出来るのだ。この世の中さえもままならないというのに。言葉にしてみても改めて思う。こんな私に何が出来るというのだ。しかも「死んで」行くという。そんな事は出来ない。ここまで考えて、自分の発想に可笑しくなった。

『これは夢なのに。若しくは、私の現実逃避なのに、真面目に・・・馬鹿みたい。』

私が、こう答えるのを待っていたかの様に、光は間髪入れずに答えた。

「この世界の常識なんて、何一つ関係ない！年齢も、能力も、何もかも超越して人間の資質だけで戦える世界なの。」
更に強い口調でその光はこう言い放った。

「だからこそ、私は貴方を選んだ。人として、常識のある貴方に託してみたいの！だってそれが、私達の世界にとって絶対無二の強さになるから。」

分かつている。分かつているのだ。この光は、私の一番弱い部分を見越して言っている事位。こう伝えれば私が反応する事を見越している。目的は分かかったものじゃない。それに、それは人として正しいのか？・・・そう思っているのに、何かが変わる・・・そう考える自分がある。

・・・それでも、私の中の声が、本当にそれでいいの？そう問うのだ。

この世界を中途半端に逃げ出して、次の世界で上手く生きていける筈が無い、と。

「死んで生まれ変わりたいと思えるほど、自分が不幸だとも思え

ない。悪いけど、他をあたって。」

馬鹿な私・・・この世界から逃げ出してどうするの。仕事だつて、私だから出来ている事があるはずよ。こんな事、絶対あっちゃいけないよ。いくら夢だとしても、そんな事に希望を持つちゃ駄目だ。そう、今までの人生や友達全てを投げ出していい筈なんて、ない。・・・これが私の妄想でなければの話だ。

少しの沈黙後、光は怒りを爆発させる訳でもなく、抑揚のない声で呟く。

「ふ・・・ん、そう？ また、来るわ。」

光がそう告げた瞬間、部屋の中は漆黒の闇が広がった。そこには隣の住民のテレビの音だけが、低く響いている。

第2章 The selection - 1

パソコンにデータを打ち込みながら、昨日の夜の事を思い返していた。気もそぞろになり、何度もバックスペースキーを押す。

『夢……』

いや、夢にしてはリアルで生々しい。何度も「変な夢を見た。」と思うとしても、光の一言ひとことが、頭から拭う事が出来ずにいる。でも……と思う。

【自分の世界を救って欲しい。】

そんなゲームの中の話……正気の沙汰ではない。本気で病んでしまったのかと思うのだが、目が覚めたら全てがいつも通りだった。しかし、病気の人間は一樣にそう思うのではないだろうか？

『……どうしよう、病院に行くべきなのだろうか？』

「はあー。」

無意識に溜息を吐いた。周りの雑踏が、遠い場所から聞こえてくるような感覚に陥る。気が重い。気持ちだけがやけに高揚して、反動でとても疲れた感じに良く似ている。朝からずっとこの思考のループに陥っていた。

『今すぐ帰りたい……。』

目頭を押さえながら、けだるくパソコンに目を向ける。先程からちつとも仕事が進んでいなかった。その時、右下から社内メールが浮かんだ。

【お疲れ様】

『え、沙織？』

今日は朝から外回りだと言っていたのに、社内に居る事に驚いた。

【おはよう。朝見かけたら、何だか疲れているかなって感じだよ。大丈夫？ 昨日飲みすぎちゃった？】

彼女の優しさが、文面から滲み出ている、いつもより何倍も嬉しか

った。気にかけてくれる人がいる。それが、有り難くそして嬉しい。
『それなのに、自分の中の声なんかに心乱されて馬鹿だ、私。』

【昨日はお疲れ様。 実は昨日、変な体験をして。】

いけない。本当におかしくなっちゃったって思われちゃう。一気にデリー
トキーで削除をしながら、何とか無難な文章を打ち込んでみる。

【昨日はお疲れ様。 あれゝ外回りは？？

愚痴が多くなってしまったけど 楽しかったね。 聞いてくれて
ありがとう！ すっきりしちゃった。

疲れてる？そんな事ないよ。でも、昨日少し飲みすぎちゃったの
かな？ 夢見が悪くて（<―>） でも、大丈夫。

気にかけてくれてありがとう！】

・・・送信、と。夢見が悪いという事にした。私、大丈夫だよ。

「ふー」と一息ついた時、彼女からのメールが浮かび上がってきた。
返信が早い！夢見が悪いなんて書いたから、心配してくれてい
るのだろう。

【外回りだったんだけど、急遽予定変更になったの。

ふふふ。その夢見の話聞きたいな。一緒にランチしようよ！】

沙織の存在は、自分は孤独じゃないと気づかせてくれる。今日の
朝、普通に目覚めて良かった・・・仕事に来る事が出来て良かった。
そして、そう思えて良かった。腕時計に目をやると、後二時間足ら
ずでランチの時間だ。つい先程まで、中々手が出なかった書類の束
に手を掛けた。

『二時間あったら終わるわね。よし、ランチを楽しめるように、
頑張って終わらせちゃおう！

最近忙しかったから、少し疲れていたのかもね。』

そう思うと、心なしかキーボードを弾く指先が、軽くなるのを感じ
た。

第2章 The selection - 2

沙織の言葉に、微笑みを堪えながら、ランチの了承メールを飛ばした。

『あはは。大した夢じゃないつて。でも、ありがとう！じゃ、パスタ行く？ほら、この前行った（ハ・ハ）。じゃお昼にね。』送信、と。思わずニンマリ口元が緩む。

「あら、何だかご機嫌ですねえ。」

同じフロアの後輩が声を掛けてきた。

「え？ そう？」

データを打ち込む手を止めて、上司からの視線を阻むように背を向け応対する。こんな場面を良く思う上司ではないからだ。少しでも長く話そうものなら「給料泥棒かね。就業時間中は、集中してほしいものだがね。」なんていう声が飛んでくる。今日はこれ以上の気遣いは出来ない、そう考えての対応策だった。

「忙しいけど、もうすぐこの仕事が終わるそうだからかな。」

朝のセットに、どの位の時間を要しているのか想像も出来ない、完璧な風貌に少し見とれながら、そう伝えた。

「そうなんですかあ？」

後輩は大きな瞳を更に大きくしながら、髪をクルクルと指で回しソツと耳打ちをする。

「昨日の・・・あれ。気にしない方がいいですよ。あの粘着質つて、もう病気ですから、ね？」

この会社の女性社員だからこそ、分かる暗黙の空気が流れる。私は、小刻みに頷いた。

「じゃあ。」

そう言いながら、後輩は屈託のない笑顔で微笑み、その場を後にした。彼女の言葉は、私に対する嫌みではない。

これが会社の現状だ。この会社の女性社員は、希望をもって入社

した時から、長い年月を掛けて、少しずつ仕事を諦め、この会社に期待する事を止める。先程声を掛けてきた後輩も、入社当時は会社の在り方に随分と会社に警鐘を鳴らし、戦っていた一人だった。しかし、

「これ以上会社の方針に納得できないのであれば、部署移動も・・。」

そんな会社の声に、女性社員は落胆し諦める。だから、それぞれが方向修正を行っていくのだ。ある者はプライベートに。ある者は結婚に。ある者は外の世界へ可能性を求めて、会社を辞めていく。女性蔑視だと叫ぶ前にやる事があるのでは？と思う時期もあった。しかし、会社全体に根付いた覆らない現状に、皆の思考は止まるのだ。私は、どこにも行けなかった。社会人として与えられた仕事、そしてそれ以上の可能性を信じて、疑問を繰り返しながら、方向転換が出来ずここまで来たのだ。

これ以上考えてはいけない。ここで、私は思考を止めた。

「で？　どんな夢だったのよ？」

ゴルゴンゾーラのパスタを口に運んでいた私に、沙織は嬉しそうに聞いてきた。

会社の近くの洋食店で、既に店内は一杯だ。私たちは十二時丁度にダッシュをして、何とか席を確保出来た。必死に走ったものだから、到着した時には自然と笑みがこぼれた。スパゲティはとても美味しく、沙織との会話は楽しくて、朝の憂鬱な気持ちを、あつという間に払拭してくれる。

「何でそんな嬉しそうなのよ？」

私は話したい衝動を何とか抑え、ニヤニヤ笑う沙織に問う。

「だって、夢見が悪いつて言っている割にすっきりした顔をしているじゃない？　実は素敵な夢だったのかしら？　って思ってたね。ねえ？　ホントに夢の話？？」

もぐもぐと口を動かしながら、それは貴方の気遣いが嬉しいから・・

・そう暖かい気持ちになった。

沙織の言葉に背中を押された気持ちに成り、

「昨日の今日でそんな事、ある訳ないじゃない！」

うーん、あのねー・・・笑うよ。絶対。」

まだ話してもいないのに、嬉しそうに笑う沙織を見ながら、絶対笑われると確信した。私はかなり用心深く、内容をかなりオブラートに包んで、あたかも夢だったかのように（実際夢だったと思うのだが。）昨日の夜の事を話した。

「で？その光から自分の世界を救ってくれて言われたって？」

私の言葉を復唱しながら、沙織はポカンと私を見ている。私は波立つ心臓を必死に隠しながら、とぼけた顔で彼女を見る。

「ねえ？変な夢でしょ？ 何だか可笑しくなっちゃって。」

沙織は、止まっていた手を思い出した様に動かしながら、スパゲティをパクリと一口頬張った。モグモグする口を押さえながら、今にも吹き出しそうな顔をしている。

「ん、もう！何の願望よ？勇者に成っちゃうの？」

二人、「無いって！そもそも成れないって！ 言うか、無理だから！」と「あはは！」と噴き出した。

「なーんだ。何とも思っていなかった人が夢に出てきて、好きってことに気付いたの・・・なーんていう甘い展開を期待していたのに。」

沙織の想像力の豊かさに、思わず笑いが出てしまう。

「えー？ 一体なんの妄想よ。さすがに、それはないんじゃない？」

完全否定する私の言葉に、

「分からないじゃない？ 駄目よー自分から否定したら、夢にも出ないからね。」

そう言いながら、沙織は少しプツと頬を膨らませ、悪戯げに笑った。私は、そんな彼女を見て、ホッと体の力が抜けた。

「なーんだ、やっぱり夢だったんだ。」

いつもの日常に、自然とそう思った。そうか、そういう風に笑い飛ばしてほしかったのか・・・。

「午後は？ 外出なの？」

「うーん。そうだねえ。予定はあったけど、今日は会社にいる予定。事務処理やんなきゃ。」

食後のコーヒーを飲みながら、ふうと彼女は溜息を吐く。

「ふーん。一日外出していると仕事が溜まって大変だねえ。」

店を出る頃には、朝とは打って変わって、晴れ晴れとした歩みで部署に向かった。

第2章 The selection - 3

昼食から戻った私は、先程までの幸せな気持ちと相反した状況に追い込まれていた。

「少し時間、いいかね？」

上司がさも愉快だと言わんばかりに、ニタニタと笑いながら肩を叩いて来たのだ。いつもであれば、長々と自席で小言を言うタイプなのに、あえて会議室を指定してきた時、嫌な予感が過った。

広い会議室に二人が向かい合って座ると、圧迫される空気に気持ちがあたふた。そんな空気すらも楽しむ様に、上司は長い前置きを置きながら言葉を繋いだ。

「それでね。君に、会社からお願いがあつてねえ。」

上司の猫なで声を聞いた瞬間、後頭部から背中にゾワツとした感覚が流れた。もったいぶりながら、あのねえ、でねえと繰り返している。

「庶務に欠員が出てねえ。ほら庶務って仕事は地味だけども、やる事いっぱいあるじゃない？ だって、社員が働きやすい状況を作るのが仕事でしょ？」

「・・・・・・あの、それで・・・・？」

この後の展開は、聞かずとも分かる。上司の言葉を待つまでも無く、私の脳裏には様々な思いが駆け巡る。

『・・・・庶務？でも、まさか？ 部に私がいなくなったら？ いないかったら？』

出世をする道はなくても、それは会社の方針だからと思っていた。私の存在は、認められていると、認められている筈だと思って頑張ってきたのだ。目の前の男は目を細めながら、嬉しそうに薄ら笑いを続けている。言葉を発せない私に向かって、トドメを刺す様に大きく身を持ち出す。

「ふう。だからねえ、長く経理で実績を積んでもらった君に、今度は庶務で活躍してほしいと思っっているのだよ。」

・・・その経験を活かす仕事が庶務課にあるとは思えない。いや、庶務の仕事がどうと言う訳ではない。会社は無駄な仕事はない。会社に所属している以上、異動は当然視野に入れておくべきだろう。会社は組織なのだから・・・そう思っているのに、思考は拒絶を続ける。

『分かっている。分かっているけど！今の部署で頑張ってきた・・・それが唯一、この会社にいる理由だった。それだけを支えに、仕事に取り組んで来た。それだけが、私の誇りで。それだけが、私の希望で・・・』

（庶務課は、長年勤めてきた女性社員の、最後に行き着く場所とされている場所だ。評価は厳しく、社内の不満の捌け口。会社がこの部署に辞令を出すときは、リストラ勧告と同じだといわれている部署。またの名を、「不要島」。忌み嫌われる部署だと言われている。ここに異動を命じられた社員は、それだけで退職を決意する程の部署だった。）

この会社に勤めてきて、初めてじわりと目頭が熱くなった。しかし寸でで、その感情を押し殺す。この人の前で泣きたくない、その一心で何とかその一線を越えずに済んでいた。

「課長、私の・・・仕事は？」

「あー。君はもうその事は心配しなくていいよ。僕が見るから。大体さあ、君少し立場をわきまえて発言したまえよ。この前だって、僕が分かっているような発言なんてして、僕の立場ないじゃない？まあったく！飛ばされても文句言えないよねえ。見ている人は見てるっていうかさあ。」

だいたいさー長年勤めているからって、勘違いしていないかね？仕事は年数じゃないよね、どれだけ仕事に対して誠意と責任を持

ってやるかでしょう？ 自分の専売特許ですゝみたいな顔してもらっても、会社として迷惑っていうか、そんな会社の迷惑、分かっている？ そんな……。」

どこかの自己啓発の本を読みあげる様な言葉は、私の中に何一つ入って来なかった。

『この前の報復？ そんな理由で？』

「自分だけが、全体を把握しているなんて思っている訳？ そんな訳ないよねえ。マニュアルが徹底されているこのご時世に。誰でも出来るつての。あんな仕事。」

自分だけが特別ななんて思っただけで仕事されると迷惑だよ。」

私を飛ばす理由をずらずらと並べ、課長は捲くし立ててくる。ガランとした会議室に、上司だけの声が響き、頭の中で木霊するような錯覚を覚える。

「おっしやられている意味が、分かりません。」

こうなると、手がつけれない。でも、言わずにいられない。勿論仕事で、彼の事を馬鹿にした態度を取ったつもりは無い。チームの事を思い、経験からくる助言だと思っていた。そんな風に思われてしまっていたのかと思うと、もう自分の全てが否定されたような気がして、自分がこの場に居る事自体が不思議でならなかった。

私の言葉がカンに障ったのか、フーフーと荒い息を吐きながら、こう上司は吐き捨てた。

「ていうか、も、明日からうちの課に来なくていいから。荷物まとめて、とつとと庶務に行つてよ。」

この言葉に、今まで我慢してきた感情が、一気に沸点まで到達し、そして弾けた。何なのだ、この状況は。

「その言葉は、会社のご判断ですか？ 部長に確認させて頂いても宜しいのでしょうか！」

私の剣幕に、切り札と言わんばかりに、ニタリと笑う。

「ふう、当たり前だろ。会社からの辞令だよ。君に対するね。あ

くまで僕は、代弁者だけど？」
そう言い放った。

『え……？』

底の見えない地底へ、一気に突き落とされた……。そう感じた。これが会社の判断だつて？ 意も言われぬ、虚無感が襲う。

何故？ 何故に、長年頑張ってきた私に？ ここまでの仕打ちって何なの？ 誰にでも出来る……。そんなことは分かっている。

『ふ……。リストラ対象者は、皆一様にそう思うか……。』

突き付けられた現実に、何だかもう、どうでもよくなってきた。窓から差す午後の暖かい日差しですら、私の気持ちの慰めにもならない。廊下から聞こえる雑踏が、別の世界の音のように聞こえて来る。仕事も、会社も、この上司も、怒りも、悲しみも、どうでもいい。

さすがに、ジワリとくる感情を抑えきれなくなる。あーもう耐えられない。いつその事、辞めてしまおうか。考えていなかった訳ではない。今の生活は出来なくなるかもしれないが、今以上の屈辱があるだろうか？

今までの自分を思うと、可笑しいのか、悲しいのか、何故か全てが混じり合い、自虐的に少し笑った。

第2章 The selection - 4

その刹那、突如昨日の光が現れた。

「え。」

あまりの衝撃で動けない私に、その光は気だるそうに単調な声で、合わせてこの状況が当たり前と言わんばかりに告げる。

「さあ、どうするの？ 昨日はあせって台無しにしちゃうと元も子もないから、一旦引き下がったけど、正直あんたに付いているのも飽きちゃった。何とか扉は開かれたし、もう強引にでも連れて行くわ。」

「何故・・・ここに？」

光の先に居る上司に目を向けると、こんな状態にも関わらず、にやにやと締らない顔をしている。

「私・・・しか見えていないの？ やっぱり私がおかしく・・・。」

『

絶望の淵に立たされる思いで、もう一度目を落した時、上司の異変に気付いた。確かに笑いながら座っているのだが、明らかに人間のそれらしくない。人間はこんな風に、不自然に存在する事が出来るのだろうか。

一瞬、突然の光の出現に、驚いて動作が止まっているのかと思っただが、全てが一瞬にして画像として切り取られたようだった。何かを言いかけた途中だったのか、半開きの口、そして今では焦点が定まっていない目。正に蠟人形そのものだ。

『な・・・何？ 何が起きているの！』

あまりの非現実的な光景に、思わず叫ぶ。理解の範疇を超える状況に、ゴクリと息を飲んだ。

「何なのよ！ 私がおかしいの？ 何故私なのよ！」

「もう、本当に面倒くさい・・・この女。」

私の叫びに、ブツブツと言葉を繋ぐ。

「あゝうざい。たく、こっちの人間は、何故にそう考えすぎるのかしら？ もう少し、シンプルにしてくれない？ 面倒だわ。それとも、自分の世界の常識以外を、受け入れるキャパが少なすぎるのかしら。」

「はあ・・・本当に理解不能。 あんたである理由は、昨日伝えたわ。ま、もっと言うと、子供だと死ぬ事を現実には捉えられなくて、すぐ死んじゃうって事かしら。」

光の玉は私の存在など、どうでもいいというかのように、独り言のように捲くし立てている。

「ゲーム感覚だといった結果を出すんだけどねえ。少し痛い思いしただけで、戦意喪失しちゃうし。自分の限界が図れなくて、力のコントロールにムラがあるし・・・。だから、簡単に生まれ変われる、元の世界に戻るなんて夢を見る。大人も同じようなものだけど、諦めも早いから。」

物事の道理が分かる前から育てても良いのだけど、そんな時間も無いしね。じゃ〜どうしようかなって考えた時、大人に目を付けたって訳。人間って人生が半分を過ぎると、漠然と命は永遠ではない事を認識する様になるのよねえ。・・・それに、特にあんた、もうこの世界にいらない人間じゃない？ 通常は成功者が選ばれるけど、あんたに限っては、この理由しかないって。」

「あ・・・の、どうするつもり？」

「全く！ 思った以上に時間が掛かったわ。最悪最低な状況に追い込まれても、何かしら活路を見出したりして・・・本当に、冗談じゃないわよ。本当に厄介な人間。」

私だって、もっといい人材に当たりたいじゃない！

私の質問なんて耳に入っていないようだ。明らかに私に対する不満にゾクリと背筋が凍る。意味は理解出来ないが、昨日とは、全く異なる状況である事だけは明らかった。こんな場所に突然出てきたのも、状況が切迫している様に感じる。

『扉が開いたって何！？』

さすがにもう夢だとは、思えなくなってきた。何よりも、この状況は異常だ。

思わず後ずさりをした瞬間、光から鋭く何かが伸びて手を掴んだ。
「いやっ！」

そのまま今まで味わった事が無い程の力で、グツと吊るし上げられた。余りにも強い力のせいで、掴まれた手首から血の気が引き、思わず唸る。何とか振り解くべく、手を掴んでいるものに目を移した時、思わず目を疑った。

それは手だった。しかし、只の手では無い。私の手を掴んでいる手？・・・え、これは骨？

「言っただでしょ。あんたが生きている現実を捨ててって。あはは。」

あゝはははははは！！

光の感情は今や沸点に達したかのように、甲高い高笑い繰り返す。この異常な状況に、恐怖のあまり動く事も話す事も出来ない私に、その光はこう繋げる。

「死にたくなかった訳ではないみたいだど・・・でも、未練もないでしょ？」

そんな恐ろしい言葉と同時に、グイツと光に引き寄せられた。光だけで、他は何も見えない。見えない事が救いとすら思える。

「痛！！」

更に腕をねじ上げられ、骸骨の手は今や目の前まで迫っていた。もう、私の存在なんてさほど重要では無いと言わんばかりに、自分自身に言い聞かせるように言葉を繋げる。

「もう、私は十分待ったわよね？ 多少強引でも、もう構わないわ。」

そもそも、貴方が良い理由なんて知らないわよ。私が聞きたい位だわ。

ネガティブでえ、力も無いくせに正義感だけが存在価値で？ 正しい事をしていれば幸せになれるって思っている馬鹿な生き物。正に暗いったら。なのに、全てにおいて中途半端で。

今までスカウトしてきた中で、一番つまらない人種。それなのに、あんた、また頑張るつもりでいたでしょ？我慢出来なくなっただわ、いい加減。

何とか扉は開かれたし、あんたの意志なんて、どーでも良いの。強引にでも、連れて行く、わ！！」

掴まれた手に、更に力がこもる。

「私、本当にあんたが嫌い。あの世界で、さっさと、のたれ死になさい。」

悪意が籠る言葉と声に、体から汗がドツと噴出した。自分自身に何が起こっているのも理解出来ない。理解出来ないが、昨日とは打って変わって危険な状況である事は確かで、生まれて初めて「死」というものを、強く実感する状況に追い込まれている・・・それだけは理解出来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8274x/>

エンダ

2011年11月4日08時08分発行